

神  
ト人ト  
罪ト救

平岡希久著

東京

警醒社書店

020330-000-9

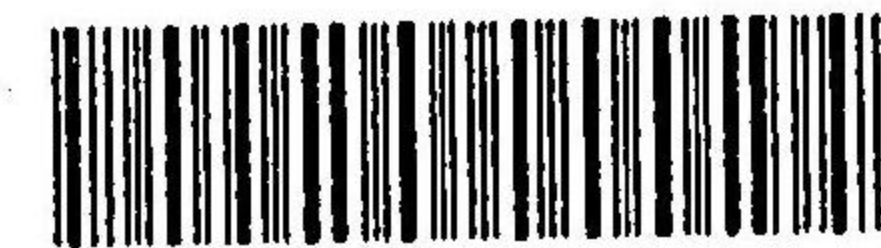
特52-528

神と人と罪と救との関係

平岡 希久/著

M26

ABI-0136



神と人と罪と救との關係

目錄

第一節 神と人の關係……………十頁

第二節 人の生活……………十七頁

第三節 人と罪惡……………二十頁

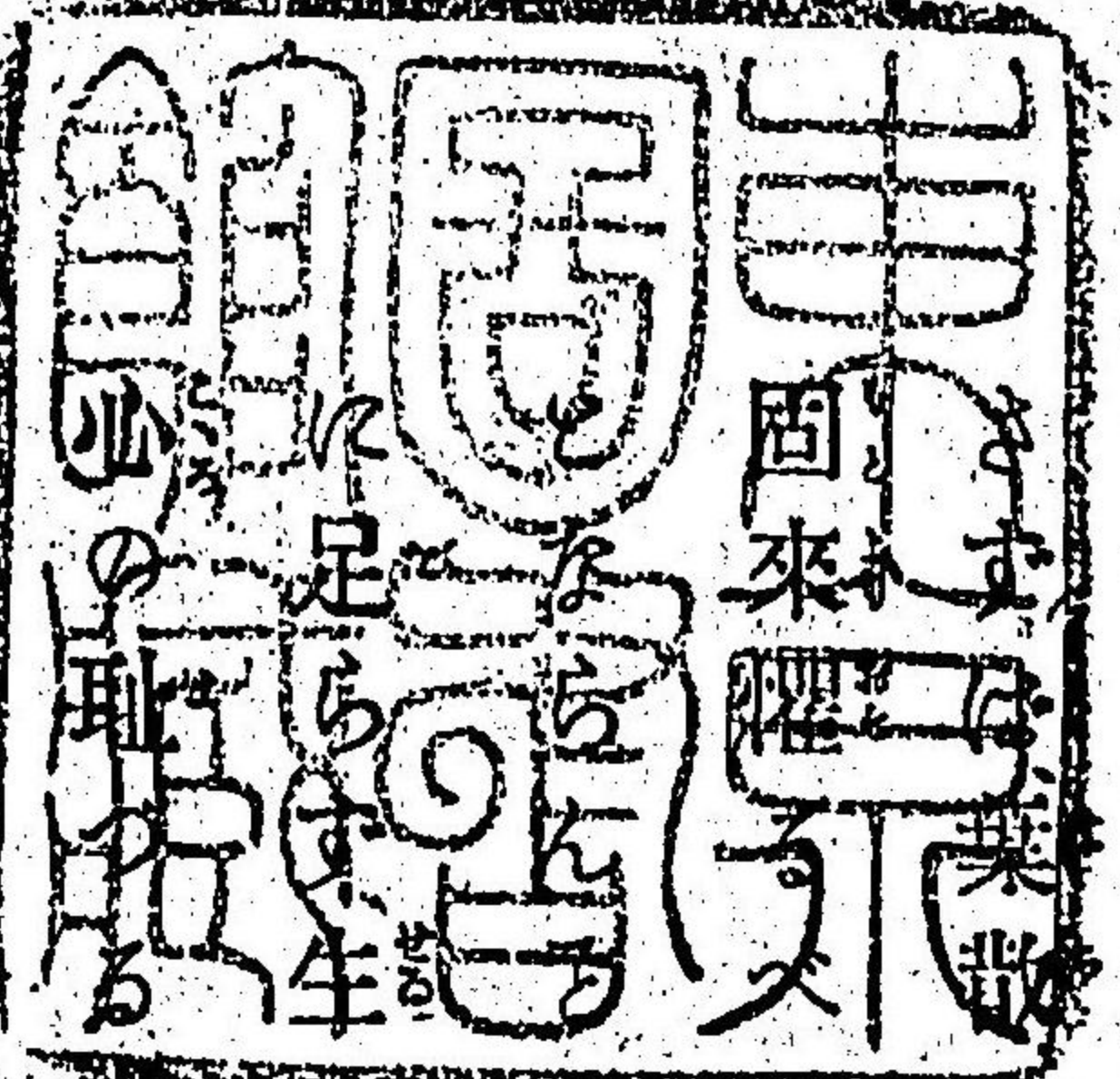
第四節 罪と救……………三十頁

第五節 解疑問……………三十一頁

第六節 結論……………四十頁

基督教解疑篇著述に就て愚意を序す

昨春病に侵されて以來養療怠るに非され  
 えて尙愈せず私に思ふ露命期すべからず盡  
 花落ちて悔の回すべからざる事あらん死  
 處にあらす懼るべきは生きて無益の奴  
 たり負ふ處は泰山に餘あり盡す處は一毛  
 と貪り安を偷むは願にあらす榮譽驕傲は  
 處我が朝夕に祈願して止ざるものは草の



如く木の如く其分を果さんとなり義を盡し分を果す  
 を得ば朝露々々我何をか惜まん義を思へば短し人



生五十年分を考ふれば重し人身五有尺。今年病を養ひて閑地に遊び、一身を追望して情更に痛む筆を借り文に托して義を果さんと欲す秃筆拙想世を益するや不や旅窓孤燈考書に乏しく考證不足意を満し難し遺憾爰に存すると雖も、腦を撃て得る處あらす然れども獨慰む露滴人を益するあらば我は無益の奴とはなるまじと。

予性大に漫遊を好み、學業の餘暇常に東西を漂遊し、異聞奇觀を尋ねて想を磨し、村童野翁と款語して情を研き、古を問ひ今を談じ、普く探訪研究し、或は農夫となり

て芝草の上に談じ、或は商人となりて市塵の間に語り、樵夫と伴て山林に談じ、又寺僧と坐して由來を語る、逢處の人は悉く我が師として、其特卓の見を聽く、樂哉々々、天下の物有生無生の差別なく我が師となり、友となりて、我に教る實に多し、而して我が修習せし諸感情の中に就て、殊に宗教上の觀察は予をして、喟然として、大悟せしめしもの甚た衆かりし、宗教と日本國家及國民の關係は實に緻密のものにして、一切の事宗教の感化を受け關係を有せざるものなし、誰か謂ふ日本人は宗教に冷淡かりと、之れ日本人の真相を知らざるもの、

言なり、當今に於てこそ宗教の勢力一掃し去られたれども、佛敎傳來以來、最澄、空海、行基、道元、親鸞、日蓮等の高智識勃起して、日本國は一個の佛殿となり、左ながら天然固有の宗教國の觀あり、名山勝地悉く佛門に包まれ、巧機妙工一として宗教化されざるはなし、人情風俗言語、道德皆是宗教の流なり、日本國は天然佳絶の風景を刻み、神の美術を顯はして、宗教の神髓を藏め、人は温暖の氣、優美の風に養はれて、温厚、優美、宗教の真相に近し、故に看よ、宗教の殿堂は金彫、銀鏤、宏大、雄絶、數十萬宇、八方に洽く、佛敎大成せられ、佛理新創せられ、高妙の智識

研究せられ、保存せられたり、天正の項、耶穌敎傳來するや、三十年に滿たすして、數十萬の信徒ありたり、民の徳に厚く、信に堅く、眞理を愛する知るべきなり、基督教の發達、豈難事ならんや、日本人若し能く實相を開て眞理を仰ぐ心を發せば、滔々として眞理に歸するや知るべきなり。

維新以來、宗教の勢力大に衰へ、上下道を破り、義を失ふて、我儘のみ増長し、吹く風に草は靡き、利のある處に人は迷ふ、危機岸に臨む、救濟の道夫れ急がざるべけんや、基督教の談せざるべからざる場合迫れるなり、基督教

傳來の歴史は僅に三十年のみ、僅々の日月を以ては長  
足の進歩をなせりと云ふべきも、吾人は尙一層の奮發  
を以て勇進せざるべからざるあり、最澄の天台を立つ  
る空海の眞言を開く、或は親鸞の眞宗、日蓮の日蓮宗を  
創立するの勞苦と艱難と忍耐と奮勵とは、到底吾人の  
及ぶべき處にあらす、膽を嘗め薪に臥する素より其分  
なり、基督曰く身を殺して魂を殺す克はざるものを懼  
るゝと勿れと、保羅曰く基督の愛我を勵せり、我儕若し  
心狂るならば是神のためなり、基督の愛より我を絶ら  
せん者は誰ぞや、患難なるか、困苦か、迫害か、飢饉か、裸體

六

か、危険か、刀劍なる乎、然とも我儕を愛める者に頼り、す  
べて此等の事に勝得て餘ありと、吾人基督の愛を受る  
もの、豈徒に妻女を慰め、自身の安逸を偷んで傲るべけ  
んや、又何とてか名譽の奴となりて驕傲なるべけんや。  
予都鄙を漂遊して上根下根の基督教に對する感情思  
念の一般を察知し、私に悟る處あり、教育の道行き届き、  
智識開進せしが如くなるも、理に通じ道に達するものは  
四千万中万分の一のみ、一般の智識に至りては實に  
下劣なるを憐まざるを得ず、殊に宗教又基督教に對す  
る一般の智識に至りては幼稚と云ふべきか、迷妄と云

七

ふべきか怪疑妄誕の中に沈めて一の眞理をも承知せざるなり、豈痛嘆すべき極ならざらんや、一般の智識斯く劣等なるに拘はらず、一方には歐洲新知識を借りて附會の虚疑を逞ふするものから眞理愈掩はれ人道益匿る、是時に當り國を愛し人を愛するの吾人は果して何をなすべきぞ。

今日に於て基督教傳道の機關は略整備せり、蛇の如く狡く着々其歩を進めつゝあれば、早晚眞理の光明四空に燦然たるなるべしと思はる、然れども邪曲曖昧の途に出でざる以上は、吾人神によりて福音を傳播するを

急ぐべきは任務たるなり、教會あり、學校あり、病院あり、救助會あり、矯風會あり、新聞あり、雜誌あり、書籍ありと雖も、擴布の路に於て妨げらるゝもの少からず、教師あり、牧師あり、傳道者あり、信徒あり、醫師あり、文學者ありと雖も、其數僅々到底都鄙に洽なく及び難し、故に怨むらくは基督教思想をして全般に及ぼしむるを能はざるなり、基督教思想を全般に布衍するには適當なる小冊を廣く頒布するに如かじと予は思惟したり。

都會の傳道は好機會を多く有すると雖も、村野に至ては殆んど其の機關をさなり、牧師あるの地と雖も、牧師

の一身を以て万機に應ずること克はず真理の響をし  
て衆耳に及ぼしむるを克はず閭巷に滿てる迷妄怪疑  
遂に掃ふて克はざるなり。

我深く之を悲しみ常に思ふ田舎に牧師たるの人は万  
端に應涉して精盡き神衰へ遂に光を抱て退くをある  
べし而して其勞の幾分を分勞し其事業の一分を助く  
べき事業は小冊子を以て助くるにありと是を以て予  
は自の愚を忘れ愛に勵まされて此に小冊を刊行す適  
當せるや否や自信は他を證せされども四方の諸公子  
請ふ予の志を憐み頒布の道を計り眞理の光を千万蒼

生に及ぼしむるを力められよ我も亦奮勵此事に當  
りて屈せざるべし。

今著はす處題して基督教解疑篇と云ふ予は而後續々  
上版以て世に頒つべし

明治二十五年十月駿陽清見瀉の客舎に於て

病客 平岡 希久 誌

基督教解疑篇

神と人と罪と救との関係

宇宙萬有の主宰者たる神なるもの、存在するとは上帝論  
 に於て略論述したるを以て今は神と人との関係、人と罪と  
 の関係、罪と救との関係等を記述して基督教の破題に入る  
 べし。基督教は實に神と人と罪と救との関係を記述したる  
 ものなるなり。神と人との関係を記述したるものなるなり。  
 基督教は勿論唯一神教理を確證するものなれども、基督教  
 より見るときは神は全能の神としてよりも正善の神とし  
 て多く知られ、全智の神としてよりも仁愛の神として多く  
 知られ、創造の神としてよりも救済の神として今多く知らる  
 るなり。故は基督教は神の至性全体に關して神を説明する



ものにあらず神の性徳の一部分なる正善仁愛救済の道に就て最も多く丁度反復示す處あるものなりと知るべし。是を以て天地創造生物繁殖等に関して基督敎の論ずる所は實に簡單なり實に粗雑なり到底吾人を以て天地創造生物繁殖の事情を明瞭知悉せしむるに足らず之れ蓋し聖書は正善仁愛救済の神を示し人と罪と救との關係を明かにする歴史なれば天地創造生物繁殖を顯明にするは其目的を序述するに便するに過ぎず神天地を創造し萬物を具備し扱て人をも造り玉へりとの承認を吾人に與ふれば足れり去りながら聖書の創造説は誤謬なりと説破するにはあらず只た其説餘りに簡單粗雑に過ぎて其要を得難く前

後轉倒の記事少からず之を字句の正面より見れば解し難し去ればとて裏面より臆測推理すれば附會の情あり故に吾人は強て天地創造説を維持し却て神を害し聖書の分を誤まらんとを恐る只た吾人の創造記より得べき重要な事柄は神天地を造り玉へりとの事なり此事柄をさへ承認し得らるゝならば神の唯一全智全能万物を攝理し主宰し玉ふとは明かに反映し來るべし其如何にして如何なる順序を以て創造し玉ふやは人智開發の試験場學術上神を認むべき場處として吾人に任せ玉ふものなりと信じて敢て不都合なかるべし然るに世には創造説を以て創造説を辨護し臆測附會の説をなして以て満足せんとするものあり然れども吾人を以て之を見るに死地に立て防戦する危姿

あるなり、議論を以て大風を包て千里飛行の勢力なし之れ何  
 の爲かと言は、基督教の本務ならざる、材料の稀少なるも  
 のを以て、言を換て言は、寒兵を以て大衆に抗するが爲め  
 なり、基督教は其本務に向ては、十分充足の材料を書籍供給  
 するを以て本分上の議論に至ては、論鋒尖鋭、論辨滔々、江河  
 を決して大海に注ぐ觀あるなり、然るを笑ふべきは世の學  
 理智識を以て、基督教に反對衝突其教説を破壊し得たりと  
 凱歌を唱ふるものと、世の學理智識を以て基督教を理を審  
 するものなりと心痛せる人々の心なり、此二種の人は未だ  
 基督教を完知せざる人と云はざるべからず、世の學説は神  
 の與へ玉ふ試験室に於て神の創造を發見せんとして、駭々  
 進みつゝあるものなり、神を傷け基督教の價値を害するも

榮りと思惟するは、大なる誤謬と云ふべし、附ふ聖經と他の  
 古代史とを比較し來れ。

支那印度、日本、埃及、希臘の古代史は如何なるとを比較せ  
 る、奇々怪々の神異説は山にも川にも充てるにわらずや、紙  
 牘の詰不思議の説、歴史の奎面を蔽ふばかりなり、而して古  
 代の智識は第一の疑問研究を天地創造、人類始元に尽せり、  
 有名なる希臘哲學も聊か古怪談を離れじのみにぞ研究の  
 主眼は創世のとなにてありき、タールヌスは水を以て萬物の原

とし、アナキシマンデルスは無極虛質ト、パイロソンを以て  
 萬物の本原(アルケ)とし、アナキシメニスは空氣を以て萬物  
 の本原とし、ピタゴラスは絕對唯一の理体元子を以て萬物  
 の本原とし、ゼノフエニースは萬有諸象は不變の理体なり

とせり、此他數多の議論あれども、煩はしければ略して少し  
 く印度古代の哲學を見るべし、最も古しと呼ばれし僧法論  
 派(ニシテ、ロロ、ト、創、説、ニ、)は自性はれ常住、能く諸法を生ず、萬有萬物は  
 自然に成り出でたりとなし、毗世師論派(カ、ナ、ト、創、説、ニ、)は「ア  
 トム」(極微)より一切の物我を生じたりとなし、尼耶也論派  
(ガ、ウ、ダ、ノ、創、説、ニ、)は唯心唯識之れ萬物の原なり、心外諸物悉  
 く虚妄なりとなせり、又韋陀論派(ノ、創、説、ニ、)は那羅延天の廣  
 の中より、迦華生じ、迦華より梵天、祖公生れ、梵天より萬物出  
 でたりとなせり、此他火論師、服水論師、風仙論師、凡る百種の  
 所説ありたり、支那に於て、埃及に於て、亦其説數多なり、斯の  
 如く、各國智識研究の第一開發は、宇宙の創造人類繁殖の事  
 情にして、彼に迷ひ、此に難じ、百多の論案提出せられたれど

も悉く通過せしものなく、十九世紀の大智識を以てす、尙  
 は歸着する結論を得る能はざる大問題なるに、智識研究の  
 最も上代に開發したるユダヤ民族に於て、聖書に於て創生  
 論に至つては、此簡單の記事に満足せしもの如く、一回も  
 他國の迷に陥らざりき、聖經の談は絶えて古怪談、神異説、書  
 理學に傾きしとなく、六十六卷の結集なるに拘はらず、數千  
 年間異様の人物の記事なるに係はらず、始終一到唯一の目  
 的、人と罪と救と神とに、○注して世界の萬有を引き來り、  
 皆此目的を證顯するに務められたる、恰も後世大智が一  
 的に就て編せし如き觀あり、故に予は創世記の創造説の簡  
 軍序述せられたるも、畢竟は此目的の序文、材料、階段……  
 則ち神天地を造り及び人を造りたり……との事を記憶せし

ひるの要に外ならずと信ず、故に又簡單粗雑なるを咎めざるなり。

モ一七神の默示に由りて創世記を記せしは、古來の信ずる處なれども、(高野新批評聖經考古學等三於)其材料は悉く天出のものにあらず、古傳によりて考證せしものなり、且つ此頃の文學言語開けたるにあらざれば、語數至て少く、到底今日吾人の論議する理論を記するに足らず、之れ聖經のみならず、印度哲學を修むるにも、支那哲學を究むるにも、全様の困難あり、文字と言語は思想を表はすに足らざればなり、故に研究者は殊の外に苦勞して其意を探り、自己の推量を加へて全く解釋を二三にするの實あるに至れり、思ふに古人は吾人の解釋する程六ヶ敷思想せしにはあらずるべけれど、

文字と言語の十分ならぬより後世をして斯く困難せしむるに至りしものならん、故に創世記を研究するにも、此事情を知りてモ一七時代には未だ創造記の如き問題を説明するに適當の語のなかりしを知らざるべからず、其語數の僅少簡單なるは、古文研究家の明にする處なり、殊に創造説の如き一個の記事にあらざして、詩歌体を用ゐられたるを見ても尋常の解釋にて解釋し得られざるを知るべし、此は研究者の注意にまで短言せしにて、其詳細面白き議論は聖書批評學域は新奇の註解書に由らざるべからず。

扱て予の解釋すべき問題は、神と人と罪の關係にあるとすれば、聖書批評は少しく横路に入りたる感なきにあらず、さし大體を少しく曉せざれば、此問題の解釋にも恐るべき

誤りを生ぜんを思ふてなり。而して本問題に入るに當り一言せねばならぬとは、予の説く處は註釋にあらざれば文字上の難疑は他書に譲る、又種々賢士の論を引照紹介するの餘地なく、全く單獨の思想によるとなりとす。

### 第一節 神と人の關係

神が人を如何にして造りしかと問はゞ、聖經は左の簡單なる一句を示すのみなり、

(創世記二章七節)エホバ神、土の塵を以て人を造り、生氣を其鼻に嘘入れ玉へり、人即生靈となりぬ、

(聖書批評學にては創世記二編の古典ありて二人別々記述の古典ありと説く予も編成の古典ありと説く予も此篇の辨論は一括されたる聖書に基て別々に論せ

と右の文に依りて見れば、神は土を以て人形師が人形を造る如くなして、人を造りしと見ゆれども、之れ文字通りに解すべきものにや、クラークホヒドン等は、神物質を以て人体を造り生命は神より與へられたりとなす、予を以て見るに此文の如き神の人を造り玉ふを形容するに過ぎざるものにして、斯く簡單に造り玉ひしとは思はれず、且つ神の造り玉ひしは男子にして婦人は男子より分けられたるものなる如し、

(創世記二章二十一節)是に於てエホバ神、アダムを熟く睡らしめ、睡りしとき其肋骨の一を取り、肉を以て其處を填塞玉へり、エホバ神、アダムより取りたる肋骨を以て女を成り之をアダムの所に携來り玉へり、

と此文を讀みても、吾人は容易に承認し難き事ならん、然れども後世キリストもパウロも此事を引て、人倫を教へしを見れば、彼等も信仰せしものと思はる、又古今の神學者註釋者も皆之を容れたる。予は神の天地萬有を創造し玉ふを信じ合せて人をも造り玉ひしを信ず、然れども其方法に至りては創世記の記する如く簡單なるものなるや否や、創世記は只た其の概略を示すものにあらざるかを疑ふ、然し何にもあれ神の大能を以て吾人の測度すべからざる方法により造り玉ひしと明かなりと信ず。

聖經註解者曰く、人体は物質を以て造られ、雖生は神より分たる、又女は男の助より取られたるは、一男一女配偶の宜を教へ、又女は男より尊からず、男は女を賤惡す

るとなく全等なるべきを教ふと、

神の人を造り玉ふ目的を聖經は示して曰く、  
 (創世記一章二十六節)神言ひ給ひけるは、我儕に象て我儕の像の如くに我儕人を造り、之に海の魚と、天空の鳥と、家畜と、全地と、地れ匍ふ所の諸の昆蟲を治しめんと神、其像の如くに人を創造玉へり、即神の像の如くに之を創造、之を男と女に創造玉へり。

と聖經は人を以て神の像に似たるものとし、神の希望を負ふものとし、徳義的のものとして明かに神の目的を告たり、神の像に肖たるとは、人体にはあるまじ人の心、良心と云ふもの又は意識の事ならん……則神より嘘入られたる生氣に屬するものならん、又其二十八節には人の義務に繋がれ

たる動物なるを示して人に本分を教へ又た人格人位を告  
 ぐ曰く、神彼等を祝し神彼等に言ひ玉ひけるは、生よ繁殖よ地に  
 満るよ、之れを従服せよ、又海の魚と、天空の鳥と、地に動く  
 所の諸の生物を治めよ、と、吾人は聖書によりて人間創造の手續全  
 と惜むべきことには、吾人は聖書によりて人間創造の手續全  
 体を詳かにすると克はされば、恨茲に存するも雖も、今は  
 神の大能力に任するより外なし、何分はも聖書は創造史と  
 して見るときは粗雑なり、然れども人に就て神の希望及び  
 人の義務等を教ふるに至ては明なりと云ふべし、人は神に  
 似たるもの、神より生氣を受たるもの、神より義務を負はせ  
 られたるもの、人は神より負はせられたる義務を全うする

たよりて萬物の上に立てられ主宰の權を有するとを明か  
 に知るを得たり、故に吾人は萬物の長たる地位に立つは天  
 賦の特權なりと知るなり、(希伯來書二章七節八節ヲ見)

神の人を造りし目的は既に前言せるが如く、全地と之に棲  
 む生物諸類を治めしめんとし、而して人の神に對する  
 本分義務は此等生存物類を治めんとし、人間繁殖を圖る  
 となり、能く神に服従するとなり、是に依て之を看る人  
 との義務は利己心より起るものにあらず、人と神との關係  
 は妄想より起るものにあらず、人と生物との關係は防衛  
 的起るものにあらず、利己心を看るべし、換言せば道徳なるもの  
 は學者の言ふ如く、利己心の進化、或は習慣法にあらざるを  
 知るべし、成程今日の道徳の形体が習慣法、利己心、自愛心よ

り成り立つるもの多きにもせよ、道德の心髓……本原……は人の内に刻まれし神の像、又神に命せられし命令によるものなり。 道德は人と人との關係を調和するもの、如く思惟されるれども、大原因は神の目的を達せんが爲めに人に與へられたるものなるなり、故に見よ、道德は常に天出に合し、神の目的に合はんとして、其歩を進めつゝあるを。

神の男女を造り玉ふ方法は、前言せるが如く文字通りに解説すべきものなるや否やを知らざれども、男女の差別は体形容止、音聲、構造、性質、悉く差別せらるゝと、人のみにあらずして鳥獸も亦然り、之れ生活の方法及習慣、風俗、教育等の自然淘汰によりて變成せしものとは思はれず、又物質勢力の偶然化合とも思はれず、左れば吾人は神の意志を以て造ら

れたる奇珍妙工なりと認むる外なきなり。

第二節 人の生活

神已に人を造り之をエデン園に置き玉へり、創世記二章八節より十五節に由て見るに、エデン園は甚だ美しき處なりしが如し、基督教會及び文人輩は黄金世界と呼び、又バラダイス(樂園)と稱して形容せるを以ても知るべし。

エデン園は何處にありやとの間に付て今日判然せず、考古家地質學者は之を考ひて或は波斯ユーフヘテーツ河の近傍なりとし或は印度洋中なりとし北亞米利加なりとし太平洋中なりとし又は北極地方なりとし考證面白きものあれども此に記述せば予が目的の條を陳ふる餘地を失ふを以て他日時を得て此等の考證を



蒐集して研究の材料とせんと欲す又予は創造説に關する進化論の研究を喜ぶ進化論の本原論亦見るべきものあり之に對する神學者の意見又知らんと欲する處なれば何の日か奮發一大蒐集に従事して世と共に研究するあらんとを希望す

扱て人の第一の職務は此園を治め守るとなりし(創世記二章十五節)而して人の生活の方法は此園中の各種の樹果を取り食ふにあり(創世記二章十六節)又人は全地の面にある實賦のなる諸の草蔬と核ある木菓の結る諸の樹とを糧となすべきを許されたり(創世記二章二十九節)思ふにエデン園は南洋熱地の如く花實終年絶へざる處なりしならん彼等は此樹果を拾ひ或は摘み取りて自由に之を食ひ飢ては食ひ飽ては眠りしならん

此時の人は未だ火食を知らず又衣服なるものなく裸体なりき雨露を凌ぐべき棲家もなかりしなり其裸体なりしを見て花實終年絶へざるを見ても氣候熱暖なりしを知らるゝなり

人類學中考古學追々開くるに隨て各國昔時の状態を知るを得て各國共に同一様の進歩をなしたるを知る而して近時南洋蠻島を探險するもの宛然たる現在に考古學を見るなりアダムイブの生活の如き及び舊約創世記は此等の學理と反せざるのみか究く附合するものあり彼の社會進化の條理は明かに符合して聖書中に見らるゝとなり考古學人類學を研究して人類進化社會進化を學ばるゝ人宜しく聖經を繙て参照せ

よ他邦の歴史に勝る材料を得べし  
 人祖生活の甚だ奇なるとは彼等夫婦の交際の外、劣等なる  
 動物と交遊せり、動物と交遊するは野蠻人の常なるのみな  
 らず、社會交際の乏しさ時代及乏しき人は皆然るなり、彼等  
 は動物と交遊したれども亦大能者たる神と直接交遊する  
 を得たり、之れ人類の潔白なる性情にて神に似たればなり、  
 キリスト曰く心の情さものは神を見ることを得べしと、(傳五  
 節八)吾人は神に像りて造られたる靈によりて、若し雲霧の掩  
 ふとなくば神を見るべし、神と交通し得るものなりと知る  
 べし。

### 第三節 人と罪惡

今迄の記事は基督教に取ては小引なり、而して、其問題は實

に基督教の破題にして、基督教歴史の起原、聖書の吾人に必  
 要となる根原なり、故に見よ數万年間の天地創造を三十一  
 節に記述し、數十年間人祖の生活及び命名等を二十四節に  
 記述したるに係はらず、僅々一日の事情を二十四節に述べ  
 られたるを。

扱て人はエデン國にありて自由氣樂に日を送りしが、知識  
 の樹の菓は之れを取り食ふとを禁せられ、之を食はば死す  
 べしとの神の戒を受けたり、(前世紀二章十七節)而るにエバは蛇に欺か  
 れて其樹菓を取り食ひ、之を夫なるアダムにも與へて食は  
 しめたり、(前世紀三章一節六節)是に於て神は處罰を行ひ、第一に蛇を責  
 めて第二に婦人を罰し、懐妊の劬勞を増し、男子に服従すべ  
 きものとし、第三に男子を罰じ、一生涯勞苦耕作以て生活す

べきとを宣告せられたり、而してエデン園より追出され、漂  
 泊の身となりぬ、之れ人の神と隔り、其交遊を絶らし、原にて  
 人に勞苦の生ずる基なり、而して神と隔り、勞苦の生涯とな  
 りしは罪の結果なり、罪は之れ惡の結果なり、惡は之れ神命  
 に反せし結果なり、惡は罪となり、罪は罰となりて人を墜落  
 せしめたり、  
 今之に關するキリスト教理を陳述し、而る後疑議に應ずべ  
 し、茲に人世罪惡の起原を尋ね、其開發を見るに  
 一 神に造られる人、  
 神に造られたる人の性質は純潔無垢、一點の汚點なき鏡の  
 如く、從順なりしものなり、自由選擇の意志は幸福を企圖し、  
 生存する爲めに與へられたり、生存の爲め食慾を有したれ

ども飽まで食て自由に眠れり、人類繁殖の爲めに色情慾を  
 有したれども、一男一女に限たり、色慾食慾自由の意志は  
 決して不合理的なものにわらず、人類繁殖生存に就て欠くべ  
 からざるものなれば、其分を越えねば、合宜の者なるなり、  
 彼等の性は善なりしや惡なりしやと言は、無論善の方な  
 り、然し此時代には善とも何とも呼び難し、蓋し名目上父母  
 ありて子女あるにわらず、子女ありて父母の名は生ずるな  
 り、故に名目上善ありて惡あるにはわらず、惡なる名ありて  
 善の名出づ、事實上より言は、父ありて子あり、善ありて惡  
 出でしなり、惡と云ふ實體存するは、おらず、善の軌道外に  
 出づるもの、即ち惡なり、恰も父母の間に成るもの、子なる  
 が如し、  
 神に從順にし、我が爲す

べきとをなせば、其にて宜しかりしなり、  
 二 罪惡の第一階 神に從て運動すべき動物(則人間)が一朝運轉の術を誤りて  
 其軌道を飛び出して神の禁せし物を取れり、神意背反之れ  
 惡罪の第一階なり、  
 人祖は蛇に欺かれて惡をなしたるが如し此蛇とは今  
 日の蛇なるべきや蛇は言葉を發すべき乎蛇は救しき  
 ものなるとはキリストの教を見ても知らるれども蛇  
 が言葉を交へしとは思はれず使徒等を始め蛇の物言  
 ひしは惡魔の言はしめしなりとす然れども蛇にして  
 物言はゞエバ必ず驚く筈なりエバの更に驚き怪しま  
 ざるを見れば人間の如く語りしにはあらず此頃の人

間の言葉の發達せず禽獸と似たることを思は、以心傳心位の解釋が宜しからん且つ人祖以下神と語を交へし事を記すれども之れも吾人の知る處の人間の言葉にはあるまじ此頃には諸物を通じて解意する有様ありしと思ふなり今日にても禽獸を侶として長く遊ぶ人は禽獸の形容音聲にて其意を知り禽獸も亦人の心を知るあるを實驗す況んやアダムイバの侶の多く人は禽獸なるに於てをや況んや未だ完全の言葉なき彼等の時に於てをや予啞子を見るに彼は口舌の運轉不十分なるにはあらず多くは耳聾にして言葉を聞きしことなければ自啞なるなり然れば人の言葉は天然のものにあらずして追々に進歩せしものなるを知るべ

しアダム等何ぞ完全の人語を知らんや又啞子は口啞  
なれども形容顔色によりて巧に吾人の心を察し又能  
く犬猫の心を推するを見るなり思ふにアダム等も亦  
此啞子の如くなりしならんと明かなり

人の神に背きし意を見るに一は食慾(創世記三章六節)より、二は  
色慾(創世記三章六節)情に非らずより、三は智慾(創世記三章六節)神と同一なら  
んとする窺察(創世記三章六節)心(創世記三章六節)より、(創世記三章六節)遂に神に背きしなり、

善悪を知る樹とは如何なる木なりしや之れも後世名  
づけしものなり此木實を食ふて人は智識を得るにあ  
らざるべし此木實を食はざる前は人間暗愚なりとは  
すべからず只た之れ神自由を制限せしに外ならざる  
なり(後に解説あり)

三 罪惡の第二階

アダムイブは此樹果を食して後神を恐懼るゝの情を生せり、  
恐懼(正義)をするの情は惡の第一の結果なり吾人も惡をなせば、良心に責められて、  
恐懼の情を起す如く彼等も恐懼して神に逢ふ克はずして匿れたり、  
(創世記三) 匿るゝ之れ罪惡の第二階なり。

四 罪惡の第三階

彼等惡をなして恐懼せば宜しく謝罪すべきに、匿るゝとは惡を掩ひ遁れんとするなり、  
而して神に見出さるゝや裸体なるにより神に禮を失ふを懼ると答へたり、  
此答辨は偽善なり、何ぞ有の儘に白状せざる、  
然れども惡は謝し難く、  
此易し、此偽善之れ、  
惡罪の第三階にして神を詐はるの心、  
之れ

◎悪の第二結果なり(三章十節)

五 悪罪の第四階

既に禁を犯したると明白となりければ、アダムは婦に勧められたりとして罪を婦に譲り、イブは蛇に勧められたりとして罪を蛇に譲らんとせり、之れ禁を犯せし理由なり、神の間は食ひたりもやどのとなりし、何不食ひたりと白狀して罪を謝せざる他に譲らんとするは自己を免かれんとするなり、利己主義なり、他害主義なり、道既に匿れぬ(創世記三章十節)

六 罪惡の結果

神に造られたる純白なる人の像は早や失せぬ、惡は善に復らずして惡より惡に進み行けり、アダム等の罪を免かれんとするは吾人の心と比して全感を表さるゝなり、而して恥



此心は道々に發達してアダムの子  
 不肖に至りては兄弟アベルを殺して知らずと抗言した  
 り、追々に人は墮落せり、罪の下に賣られたるなり、人は最早  
 善に歸るべき道を失へたり、良心の指命には従ふ克はず、思  
 はずして罪に陥り易し世人獨坐己が心身を觀察するどき  
 は誰か己が心の濁り汚れたるを知らざらん善に弱く悪に  
 強きを感せざらん己が良心に従ふ克はざるを認めざらん、  
 如何にして吾人は此汚濁なる心身を清潔善良眞の道に合  
 はせん乎之れ道徳教の起る處にして老子は自然に放任せ  
 んとせし佛氏は洗坐黙思世外に身を置かんとし孔子は規  
 を以て導かんせり而して何人も苦勞の結果を満足する  
 克はず、惜むべしを々々智者バウロも全情の人なりき、曰

く我爲さんとする善は爲すと克はす意はざる悪は之を爲せり、我肉は強くして眞の道に従はず、嗚呼我困勞人なる哉。誰か此罪の位地より我を救はん之れ主イエスキリストなるが故に神に感謝す。

### 第四節 罪と救

人神の禁を犯して其心を汚し悪に就きたり、萬物の上長たる分を失へり、(希伯來書)神の像を失ひ神に詐はり自己の榮譽を專にせんと思へり、神は之を快とせず如何にもして再び本性に歸らせんと計り玉へり、恰も放蕩兒の善に歸らんとを父母の願ふが如し、是を以て神はキリストを下して汚れたる世に眞人を示し、罪の贖手となさんとを約せられたり、曰く蛇の苗裔の罪人と婦の苗裔の苗裔の間に怨恨を置かん、彼

は汝の頭を碎き、罪の權を汝は彼の踵を碎かん、(創世記三)此約束は全く神の人を憐及てのとなり、而して數多の勞苦を以て成し遂げられたり、(處女の懷妊)耶穌の磔刑は中に解説す、其成し遂げらるゝ順序經歷之れ基督教なり、

### 第五節 解疑問

世上の懷疑するものは以上の説明に満足せずして疑問して曰く、予は以下の答辭に向て聖經上の引照教會の解説神學家の脱なをとして此に紹し、雖し今は只た研究者の益を計り簡単に解説すべし、

- 一 神何故に善悪を知る樹を置きたりしや、
- 一 園中善悪の樹の在りしは如何

難者曰く神は何故に園中に善悪を知る樹を置き、之れが菓實を食ふとを禁せしや、神の之を置さしは人を罪に誘ふも

のなるべき、此樹にして在るとなくば人罪に陥るとなかるべし神の心を勞するともなかりしならん、此疑問は善悪を知る樹の實あらざりしならば罪もなかるべかりしと云ふ意味あり、老子の所謂賢を尙ばされは良を以て争はざらしめ得がたきの貨を貨はざれば民をして盜むを爲さざらしめ欲すべきを見ざれば心をして乱れざらしむと謂ふに等しく、一に偏して十を知らざるとなり、釋氏も情慾の制し雄さを覺りて隱遁世俗を遠からんとせり、之れ消極的の論なり、善悪を知る樹の話は、聖書の罪惡の起原を示すには最も善き話にして、人は食慾、色慾、智慾より罪となりしとは、彼世を教へて餘りある事なり、研究者は單に此樹を以て罪原とするものから神を疑ふと雖も、此は一の話

にして分り易く示せしものとして考へよ、予は善悪を知る樹のあるなしは善惡の生滅に關係すまじと思ふ、只た人の心の如何にあるとなり、聖書の此話の極意は、人は自由の意志を與へられたれど又其自由に制限を與へられたり、と云ふとなり、自由と云ふ事は無限の意味あるとにあらざり、制限の下にあつての自由なり、存在物として物理の法に制限せられざるべからず、火に入れば焼ける、水に入れば溺死す、月に遊びたくとも遊ばれず、自由ありとも物理法外に於て運動すると克はず、若し人にして物理法を破れば其結果忽ち身に及ぶなり、其の如く人は又精神的道德的のものなれば、精神上の法則をも破るべからず、アダム等は神より自由の心を與へられたり、去りながら此自由を制限せられざ

れば、亂暴放逸に流れ、神に反き、本分をも盡し難からんとを  
 知りて、神は人に自由を制限して道徳法規を立てられたる  
 なり、故に彼樹の話しは之れ道徳の法規精神自由の制限た  
 りと知るべし。國に法律あるは人の自由を制限して却て幸  
 福を企圖せんがためなり、去りなから幸福を保護する代り  
 には罪人も法律によりて起るなり、去ればとて法律は罪人  
 を生むものなり、法律なければ罪人なしとは云ふべからず、  
 而して此説によりて法律を廢棄せば如何、必ず盜賊起り、凶  
 漢顯はれ、世は亂離の世となりて人は生を安せざるに至る  
 べし、昔時イスラエル民族はアラビヤの荒原にありて、偶像  
 を造る物品なかりしかども、女子の耳輪を取りて偶像を造  
 りたり、然れども女子の耳輪が偶像崇拜の原因となりしと

は言ふべからず、若し吾人は物品の存在を忌嫌せば、此樹の  
 みならず、彼樹のみならず、金も銀も石も土も皆忌み嫌はさ  
 るべからぬ場合となるべし、何となれば此等のもの現に人  
 をして破徳の人とならしめつゝあればなり、故に曰く咎む  
 べきは樹にあらずして人の心にあり、神の禁誡は則ち人を  
 試験するにはあらず、人の幸福を保護せんとするものなり、  
 ポウロ曰く斯て人を生さんための誠は反て是れ我を死し  
 むるものとなれり、人神に従順にして其自由を活用せば  
 幸福なるものを自由を妄用して法外に出て従順の徳を失  
 て神に捨てられたり、之れ當然の結果ならずや、古人は瓦斯  
 の人を殺す理由を知らざりし、去りながら觸るゝものは死  
 を免かれざりし、近世瓦斯は云々の性質ありて人を害する

ものなれば觸るゝこと勿れと告ぐものありたればとて、其理由解釋が人を殺すものにあらず其教示は之れ人を助けんためなり觸れて死するは觸るゝ人の罪なり教ふるものゝ罪にあらず又教示理由の悪しきにはあらず又瓦斯其物の罪にあらず瓦斯は人間に大益を興へ草木國土に欠くべからぬ物質なり畢竟之れ觸るゝ人を罪せざるべからず。故に若し難者の議論を煎じ詰めれば人に情慾自由ありしを咎むるに至らん何となれば人を自由と情慾なくば彼樹實を取ると克はざればなり人に目ありしが故に其美を見たり人に耳ありしが故に詐言を聞きたり人に手ありしが故に其實を取りたり人に口ありしが故に其實を食へり人に食慾ありしが故に其實を欲みたり人に愛情ありしが故

に其夫に進めたりとして其の罪に至らしめたる物を惡み目を抜き耳を取り手を去り口を塞ぎ食慾を消し愛情を除きたらば人は如何なる者なるべき石佛金尊木石全然となるべし之れ果して幸福なるべきや木石は罪を犯さじ去りながら幸福なるや否又斯の如きもの神の命令を奉じて萬物を治宰し得べきか之れ愚論なり之れ生れざりしならば幸福なりと言ふに全じ人に自由の意志あればこそ生存し生存を保ち運命を幸になすべけれ。

或人は惡を以て人世進歩に必要なるものとなし神が人を試験せし如く信するものあれども手は惡の少しも人世を益せざるを知る少しも善を益せざるを知る人智の進歩に關係なきを知る惡若し人世に必要ならば惡も神の攝理の

中に存すと言はざるべからず、予断して斯る神學者の説を排斥するなり、而して予は自由性によりて、十分に人智を高尚に、人性を善良に進め得べしと信ずるなり、

二 神何を賞罰を嚴にせざるや

疑者曰く神人を造りて人の罪に陥りしを嘆き救主を降す約束をなし、其順序等に勞苦し、其目的全からず、今日に至ても人に信せられざる場合にあり、神若し嚴格なる方法により人の罪を必賞必罰し、現然處罰し玉は、人は神あるを知り神を懼れ又惡をなすものあらざるべしと。

然れども予を以て思ふに神が其權力を以て吾人に關涉し、吾人の特權を奪ひ玉ふ日には、吾人は萬物の上に立てられたる甲斐なからん、又若し必賞必罰現然之を實行し玉は、

吾人は悉く殺害せらるべし、世に義人なし一人もあらず、誰か眞の道を歩むものぞ、誰か偽善の轍を踏まざらん、吾人罪惡に富めるもの誰か神の怒を免かるべきぞ、神は之を悲しむが故に人をして悔改の道を立てキリストの光に由りて暗みを歩み眞の道に歸らんとを望まるとなり、神は忍て吾人の悔改を待ち玉ふなり、之を思は、長くもあらぬ露の身を振り回り見て眞の道に合ふを勵めよ露の生命なりとて放任すると勿れ、地上の露命は萬世の福樂を繋ぐなり、吾人は獸にあらず猿にあらず、他動物と生命を均ふするは恥づべきとなり、吾人は萬物の長なり、神の像なり、進んで人の天與の位地に立て天與の分を盡せ、何予自己を卑しめて禽獸と伍するや。

第六節 結論

神は大能の神なり、大智の神なり、宇宙を創造し、萬物を主宰し玉ふを知る、吾人は神に造られて神より大任を負はせられたるを知る、吾人は神に従順にして其分を盡すべきを知る、聖書は神と人と罪と救との關係を細かに教ふれば、吾人は明かに之を知るを得て天付の良心を開發化導奨勵するを知る去れど吾人の知識は未だ神の全体に達せず、聖書亦之を示さず、故に仰て神を見れば神の天地を創造られし目的を知らざるなり、人を造り玉ふ目的と救濟の道理を知る去れど神自身如何なる目的趣向ありて之を爲し玉ふやを知らず之を知るの知識は人に不要なりとして與へられざるなり故に吾人は吾人の分にて足れりとせざるべからず、

疑を創造の神意に抱くは、分にあらざるなり、之を疑ふとは天地創造は一場の狂言神の遊戯の如くなるなり、畢竟之れ吾人萬物は狂言のみ遊戯のみ神に従て歩まねばならぬものなり。

冊子の後に附言す

一、此冊子を讀みて抱懐せられし迷疑の一端を開かれし  
讀者は、片紙を以て生に告げ玉は、生の病間の慰め悦  
び如何ばかりならん、生長く記して忘れず。

一、此等冊子中にて未だ讀者を満足せしめざるものあら  
ば、遠慮なく尊翰もて質疑せられよ、予は好便を求めて  
出來得べき限り答辯すべし

一、此等冊子中に書き足らぬ處論じ盡さぬ處ありと思召  
の讀者は、注意を惜しむ勿れ、予は喜んで訂正増補し、第  
二版に完成すべし

一、予は此等六冊を以て解疑篇の一片となし、進て筆を取  
る思考なるも大方の諸氏請ふ眞理を受するものは、進

て如何なる事情が躓となり居るや、辯すべきものあら  
ば之を教示せられよ、大小の事泄らすとなく解疑する  
は解疑者の任なり、又幸に草稿あらば送付し玉はれ、好  
便を以て發行公布するを悦ぶ、



明治二十五年十二月廿七日印刷  
明治二十六年一月四日出版

定價金五錢

静岡縣庵原郡興津町三十六番地寄留  
山形縣士族

平岡希久

著述者

東京市京橋區瀧山町七番地汽關會

印刷者

澁谷信次郎

東京市京橋區出雲町壹番地

發行所

警醒社書店

大阪市西區土佐堀三丁目二十八番地

大賣捌所

福音社

大觀個人篇	平岡希久著	定價八錢
處女の懷妊	全	全五錢
背叛の理解	全	全五錢
不可思議の理證	全	全五錢
耶穌の磔刑	全	全五錢
上帝論	全	全五錢
神と人と罪と救	全	全五錢
大觀社會篇	全	近刻
日本新婦人策上卷	全	近刻
日本新婦人策中卷	全	近刻

X-15

●日本の道徳と基督教

横井時雄 原田助兩先生合著

定價金八錢

●基督教と條約改正

某先生立案 竹中勇氏筆記

定價金拾錢

●天啓教と聖書

ニール大學教授神學博士フイツ ショール先生著 横井時雄先生譯

定價金八錢

●吾家の歴史

聰天居主人纂

定價金二錢

●婦人立志篇

徳富猪一郎先生序 巖本善治先生序 竹越竹代女史編

定價金四錢

●函嶺講話

第四回夏期學校編 松村介石氏著

定價金六錢

●保羅の心傳

全

定價金六錢

●デビの心傳

全

定價金五錢

●信仰の理

小崎弘道先生著

定價金五錢

●發賣所

東京新橋出雲町 登番地角

警醒社書店

定價金五錢